

永遠

～あなたを愛したことを後悔しない～  
【艶か一る】二次小説作品集



まめぐみ



## 第一話 宵闇～祇園祭の夜に恋して乱れて～

私は窓に填った障子戸をほんの少し開け、通りをゆく賑やかな行列をぼんやりと見送っていた。

チントンシャン、チントンシャン。本来なら心が浮き立つはずの祭囃子の音やかましい人声にかえって心が沈み込んでゆくのは何故だろう。ふと顔を上げると、紺碧の空には銀砂子を播いたよう星々が燦めき、銀の皿のような大きな月が迫って見える。

そう、今すぐに手を伸ばせば届きそうなほど近くに。

けれど、あの男はけして手に入れることはできないひとだ。それは判っていた。この恋が始まった瞬間から、あの男は私のものになることはない。それは何も私が現代という、この時代から百五十年近くも未来から来たから、ただそれだけが理由ではない。あの男と私の恋を隔てるもの、障害であれば何とでも並べ立てることはできる。

例えば「生きる時代が違う」、「身分違い」。私が太夫という島原遊郭では最高の地位にある遊女だとしても、その身分の壁は越えられない。確かに建前上、太夫は将軍や帝にも拝謁できる。けれど、それはあくまでも身をひさぐ遊女であるからこそだ。

私が島原を出て、ただの娘に戻れば、天下人たる公方様にお会いすることなど所詮、夢のまた夢だ。

だからこそ、私は太夫になった。ただ一人の、たった一人の私のあの男に誰でも邪魔されずに堂々と逢うために、廓では最高位とされる花魁にまで上り詰めたのだ。

彼と出会った時、私はまだ、彼が何者であるかを知らなかった。だが、心のどこかで、この男はけして私の手に入るひとではないと女の勘のようなものが告げていた。

彼が実は「将軍後見職」という高い身分を持ち、幕府のために奔走していること、まだ若い将軍の後ろ盾となりつつ、彼自身も次期将軍と見なされていること、それを知ってから、私は彼にふさわしい女になるために修練を積み「太夫」になることを目指したのだ。

コトリ、と、背後で音がして、私は現実に戻された。視線の先に、彼がひっそりと佇んでいる。行灯の光が紅色を基調とする、いかにも女郎屋らしい艶めかしい部屋のしつらえを照らし出す。

彼は真っすぐに私に向かって歩いてくる。まるで、この世に私しかいない、彼の目には私しか映じてはいないかのように、ひたむきな瞳で私だけを見つめて。

「ゆう」

彼が私の名を呼ぶ。深い、深い声。彼の声は京の町を包み込む夏の夜よりも深く、この廓に満ちた、どこか淫靡な雰囲気よりも官能的で艶がある。この声が耳朶を掠めただけで、私は身体が熱くなる。

彼が手を伸ばし、私は引き寄せられるままに彼の逞しい胸に身体を預ける。私の鼓動がいつになく速くなっているのと同様に、私の耳を通して伝わってくる彼の心ノ臓の音も速かった。



「町に出てみないか？」

彼のいざないにも、私はゆるりと首を振った。

「祭りを見るより、あなたといたい」

彼の胸板になおも頬を押し当てている格好の私は自然、くぐもる声になってしまう。クスリと彼の含み笑う声が落ちてきた。

「ゆうは男心を蕩かすすべを心得ているようだな」

私は彼から身体を離し、つと視線を彼に向けた。

「それは私が女郎だから？ 廓で生きる女だから、男の心を掴む手練手管には長けていると？」

「まさか」

彼が小さく笑い、どこか遠いまなざしを窓に向けた。

チントンシャン、チントンシャン。

祭囃子が遠ざかってゆく。彼は窓辺にゆき、私が細く開けたままの窓から祇園祭りで賑わう町並みを眺めるともなしに眺めた。

「ゆうが綺麗な身体だということは、お前の旦那である俺がいちばんよく知っている」

そう、「花魁」とその世話をする「旦那」の関係になった夜も、彼は私を抱かなかった。あの夜、初めての体験に震える私を彼はそっと抱き上げ、幾重にも重なった豪華な紅の褥に墮ろしたのだけれど一、そこまでだった。

彼は戦慄く私に優しく微笑み、私は朝まで彼の腕に抱かれて眠っただけだった。

一つまり有り体にいえば、私たちはまだ本当に意味で初夜を迎えてはいない。

あの「初夜」のことは、むろん私と彼だけの秘密だ。旦那と過ごす初めての夜は廓では水揚げとも呼ばれる。新造であり客を一度も取ったことのない私が一人前の「女」として目覚める儀式のようなものだ。

私を抱える置屋の主人である藍屋秋成さんも私がまだ生娘だとは知らない。いや、勘の鋭い秋成さんのことだから、もしかしたら薄々感づいているのかもしれないけれど、少なくとも表立って知っているふりはしない。

あの「初夜」のことを思い出して思わず頬を染めた私を、彼はあの夜と同じ優しい瞳で見つめる。

「良いね、ゆうのその無垢なところ、花ならばまだ誰にも手折られていない真白な百合というところか」

いつしか彼が再び間近に来ていて、私は愕いて顔を上げた。まるで、しなやかな獣が物音一つ立てず獲物を捕らえにきた—そんな気がした。もっとも、彼が私に害をなすはずがない。私が無心に彼を見上げると、彼の美しい面に苦笑がのぼった。

「そういう汚れのない眼で見つめられるとだな、俺は男として困ってしまう。お前をこのままいっそ手折らないでいた方が、見守っていた方が良いのかと」

だが、と、彼がスと手を伸ばした。その大きな手のひらが私の頬をつうつと撫で、紅を刷いた唇で止まる。

「俺も男だ、美しく咲き誇る花を手折りたいという欲望は人並みにある。ましてや、その花がひ

とめで惚れた女であればなおのこと」



彼の視線が私を射貫くように薄い闇の中で煌めいた。その切れ長の美しい双眸の奥で揺らめくは欲望、それとも、恋情？

私は唇の上で止まったままの彼の手にそっと自分の手のひらを重ねる。

「本当は今夜は祇園祭りに行くつもりでいたの。折角のお祭りだから、慶喜さんと二人で出かけてきなさいって秋成さんも言ってくれたし。でも、ここで慶喜さんの顔を見たら、何も言えなくなって。二人でいる時間がいつまで続くか判らないなら、私はお祭りを見物するよりは慶喜さんと二人だけでいたい」

不器用な私なりに、一生懸命考えた言葉を繋いで、今の自分の気持ちを一生懸命に伝えた一つもりだった。

私を見ていた彼の瞳がわずかに眇められた。行灯の火影に浮かび上がった彼の横顔は愕くほど整っていて。こんなときなのに、私は思わずドキリとしてしまう。

私は無言で、彼の次の言葉を待った。彼の美しい面からはすべての感情が排除されていて、何を考えているのか判らない。元々、自分の感情を表に出さない人ではあるけれど、今夜はいつもにも増してみたいだ。彼を怒られせるようなことをやってしまったのかと不安になり始めた私に、彼は大きな溜息をついた。

「あまり男を良い気にさせるようなことを無闇に口にするものではないよ、ゆう」

彼がそっと私を引き寄せせる。逞しい両腕にすっぽりと抱き込まれた私を彼は更に強い力で抱きしめた。

「そんな可愛いことを言われると、大抵の男は有頂天になって調子に乗って何をしでかすか判らない。飢えた狼がか弱い兎を頭からがつかつかと食べるように、お前も食べられてしまうぞ？」

私はうつむき、躊躇った末、強い意志を秘めた瞳で彼を見上げた。

「私がこんなことを言うのは慶喜さんだけですから。他の男の人にこんな思わせぶりなことは言いません」

と、彼が形の良い口の端を笑みの形に引き上げた。

「ホウ、お前は自分が男心をくすぐる台詞を口にはしていることは十分に自覚しているんだな？」

いけない娘(こ)だ、と、彼が小さく呟いた。

「慶喜さん、そろそろ」

言いかけて、カッと頬に血が上る。流石に女の方から、こんな台詞を言うのは気が引けた。彼に節操もない、はしたない女だと思われ嫌われるのも怖い。けれど、それ以上に、私は彼に恋していた。そう、たとえこれから先、いつ現代に帰ることになったとしても、彼とのたった一夜の思い出をよすがとしていきでゆけるように。

「ん？ 何だい」

いつものように彼が優しい笑みを向ける。私はありったけの勇気をかき集めて、ひと息に行った。

「私を慶喜さんのお嫁さんにして下さい」

言った後で、カーと身体中の血が沸騰して顔に集まってくるような恥ずかしさに襲われた。

彼の端正な顔が一瞬、こわばった。時折、為政者らしい鋭い光を放つその眼(まなこ)が見開かれ

、私を射るように見据えている。

「何故、急にそんなことを？」

彼の鋭い瞳は私の真意を推し量るかのようでもあった。私は恥ずかしさに身も世もない心地で目を伏せた。

「たとえ離ればなれになったとしても、慶喜さんと過ごした夜を宝物にして生きていきたいんです、私」

彼がハッとした様子が伝わってくる。私は泣きそうになりながら言った。

部屋の片隅には青磁の壺に活けた大輪の百合の花束が無造作に置かれている。花はどれも大振り、大人でもひと抱えはありそうな豪華な花束だ。



その白百合の花の色が涙の幕でぼんやりと滲んだ。

「私が言っているのは何も未来の時代に帰るとのことだけじゃありません。慶喜さんはいずれは將軍になる人だから。私なんかはいつまでも独り占めできる人じゃないし、しちゃいけないことは判ってます。だから、せめて、慶喜さん、あなたとの思い出が欲しいの」

「ゆうー」

感に堪えたような彼の声が聞こえた。

「俺は、俺は」

彼は何度か言おうとして躊躇うということを繰り返した後、漸く言葉にした。

「今まで敢えて自制していたんだ。それはもちろん、初めて男に抱かれるお前が怖がっているということもあった。けれど、それだけじゃない。一度お前をこの手に抱いてしまったら、俺自身が二度と後戻りできなくなる。お前なしでは生きていけなくなると判っていたからだ」

永遠に思える静寂の後、彼がポツリと言った。

「俺はお前に何の約束もしてやれない。夫婦(めおと)になるとも、一緒に暮らせる日が来るとも、何一つ約束できない。そんな男でも本当に良いのか？」

考える必要もない。私は即座に頷いた。彼を好きになったときから、覚悟はしていた。それが、生きる時代が違う一百五十年近くも前に生きた男を好きになるということ、いずれ江戸幕府最後の將軍という重責を背負うことになる男に惚れた代償だと判っていた。

彼が私を見つめる。

私も彼を見つめる。

私たちの間に、もう言葉は要らなかった。私たちは淡い闇の中でしばらく見つめ合っていたが、やがて、彼が私をやわらかくその場に押し倒した。

「ゆう、ゆう」

彼がうわ言のように私の名を呼ぶ。

「慶喜さん、慶喜さん」

私も彼の名を呼んだ。

白百合の花の匂いが急に辺りに立ちこめ、私たちを取り巻く宵闇が密度を増したようだった。

チントンシャン、チントンシャン。

祇園囃子が遠くなってゆく。私は最愛の彼に身を任せて、ゆっくりと眼を閉じた。



## 第二話 永遠～最後の将軍に愛された女～

---

突如として鋭い鳥の音がしんとした静寂を破った。

私はその音にわずかに眼をまたたかせ、彼の背中を見やる。だが、彼は身じろぎ一つせず、庭を眺めているだけだ。

だから、彼が唐突に言葉を発したときは、正直、かなり驚いてしまった。

「緑がきれいだ」

「一」

私はわずかな空白の後、ゆっくりと頷いた。

「そうですね。緑も、空も」

彼が振り向いて微笑む。

「そうだ、ここでは、すべてが美しい。そして、穏やかだ」

私は彼に倣って空に視線を投げた。湖のようにどこまでも涯（はて）なく澄み渡る空、したたるような眩しい緑。ここは本当に世間から隔絶された場所だ。こうして二人だけで静かな空間にいと、あたかも世界は私たちだけしか存在しないような錯覚さえ憶えてしまう。

彼を愛している私にとっては、それはとても嬉しいことだ。と同時に、今の彼にとってもまた望ましいことではないかと思う。

もう、彼の一大好きな男が苦しむのは見たくない。

それだけでなく、彼の心は大切な人を失って傷ついているというのに。いや、優しい人だから、秋斉さんだけではない。罪なき大勢の民が幕府の兵士たちが傷つき血を流して死んでいったことで、彼はどれだけ自分を責めていることか。

彼はもう、十分に傷つき、苦しんだはずだ。誰もが彼を「無能な将軍」、「自分のために戦う幕府軍を見捨てて一人だけ逃げた卑怯者」とあしざまに言う。

けれど、私だけは知っている。

これ以上、無用な血を流したくないから、大切な民を戦に巻き込みたくないからこそ、彼が敢えて「卑怯者」の汚名を被って逃げたことを。

一お前だけは生きてくれ。お前が生きながらえることだけが俺の望みだ。

彼を暗殺しようとした幕府の兵士の前に身を投げだし、彼の身代わりになって死んでいった秋斉さんの遺言を守るために、彼は「退く」という選択肢を選んだ。だが、世間の人々は彼の本心も知らずに彼を腰抜け呼ばわりする。



私は叫びたかった。

—あなたたちに何が判るの？

時代が音を立てて逆巻く激動の時代に、彼はあまりにも重すぎる荷をその背に負うことになった。たとえ、誰が将軍位に就いたとしても、その時代の流れを止めることはできなかつたらう。

知らず、熱い涙の雫が溢れた。

「何故、慶喜さんばかりを責めるの？」

溢れてこぼれたのは涙だけではなかった。私の呟きに、慶喜さんはゆっくりと笑んだ。花がゆっくりとほころんでゆくような優しい笑み、私の大好きな笑顔だ。

「ゆう、大切なものを守るためには、時には耐えなければならないこともあるんだよ」

私は涙を流しながら、だだっ子のように首を振った。

「それでも！ 世間の人はいあまりです。まるで、慶喜さんだけが悪者のような言い方をして」

彼はふわりと、また笑った。

「仕方がないんだよ。俺は現実として、まだ戦っている幕府の兵士たちを大坂に残して、一人で逃げてきた。俺のしたことは確かに卑怯だ。それは間違っていない」

「でも、それは秋斎さんの遺言だったから—」

彼が覆い被せるように言った。

「それだけじゃない。もちろん、秋斎との約束を守るためでもあるけど、この国を一引いては大切な民を守るためでもあった」

慶喜さんは静かだけれど、はっきりとした強い意思を感じさせる口調で言う。

「その大切な民の中には、ゆうも含まれているんだよ」

「慶喜さん—」

私は涙ながらに大好きな男の名を呼んだ。彼の大きな男らしい手のひらがゆっくりと伸ばされ、私の頬をつたう涙を優しくぬぐった。

「戦いに勝つというのは、何も武器を持って相手に挑んでいくことだけではない。わざと引いて相手に勝ちを譲れば、味方の払う犠牲は最小限で済む。そういう穏やかな戦い方もあるということさ」

「それで、本当に良いんですか？」

私は彼に問いかけた。

すべての責任と汚名を背負い、たった一人で茨の道を歩こうとしている彼が愛おしかった。

彼は晴れやかな笑顔で頷いた。

「ああ、俺は本望だ。後世の者は俺のことを何と呼ぶだろうな。不運な時代に生まれた悲劇の将軍、または連綿と続いた幕府を崩壊させた無能な男」

だが、と、彼は私を真っすぐに見つめた。そのまなざしはどこまでも澄んでいる。かつて幕府軍が朝廷と戦っているときに彼が見せた陰りはもう、微塵も残ってはいなかった。

「だが、それで良いんだ」

「—」

私は物も言えず、彼を見つめるしかない。彼は穏やかなままざしで私を見つめていた。

「誰かが終わらせなければならなかった。列強諸国は今や、我が国とは比べようもなほど文明が発達している。そんな時代に、幕府など存在する方がおかしいんだ。ただ一人の人間が権力を持っている世の中は矛盾している。俺はそういう矛盾を終わらせたかった。そして、そんな俺の本当の気持ちを知ってくれているのはお前だけで良い」



「慶喜さんー」

また、止まっていた涙が溢れてきた。彼は自ら進んで、激動の時代に身を投じようとしている。自分をうつろいゆく歴史という海に捧げる贅（にえ）にしようとしている。

「ああ、また泣く」

慶喜さんが呆れたように、困ったような表情（かお）で私を見つめ。

それから、優しい笑みを浮かべた。

「お前が泣けば、俺はどうしたら良いか判らないほど狼狽えてしまう。だが、その涙が俺のために流してくれているものだと思うと、男として満更でもない気持ちになる」

そこで、彼がふと悪戯を思いついた子どものように綺麗な瞳を輝かせた。

「そうだな、もっと状況が落ち着いたら、写真を撮ろう」

「写真？」

首を傾げる私に、彼が大きく頷いた。彼が写真機に興味を持っているのは私もよく知っている。現代から江戸時代にタイムスリップした当初、彼はカメラに興味を持ち、色々と質問してきたりもした。自分で様々な種類のカメラを集めているという話を聞いたこともある。

「そう、お前の写真を俺はたくさん撮るんだ。笑顔も泣き顔も撮ってやる」

だけど、と、彼はあっさり眼を細めて囁いた。

「俺はお前の泣き顔も好きだけど、笑顔がいちばん好きだ。だから、俺にはいつも最高の笑顔を見せてくれ。そして、ずっと、俺の側で笑っていてくれ。俺は俺の生命が尽きるその瞬間まで、お前のその笑顔を守り、たくさんの笑顔写真を写真に撮るから」

「慶喜さん」

私はたまらず彼に縋りついた。そのときの気持ちをどんな風にたとえたら良いのだろう。もちろん、嬉しいに決まっていたけれど、それだけではない。

今まで、どれだけ身体を重ねても同じ時間を過ごしても、確かな約束をくれたことのないひとが初めて示してくれた「約束」だった。

私は震える声で問いかけた。

「ずっと傍に居ても良いんですか？」

「当たり前だ。ゆうはこれからもずっと俺の側にいなきゃならない。春も夏も秋も冬も、ずっと同じ空を見て、こんな風に二人だけで過ごすんだぞ」

彼がゆっくりと呟いた。

「俺は最早、將軍でもないし、大名ですらない。ただ人となった俺をそれでもまだ、たった一人の男として受け容れてくれるのなら、俺は今こそお前に誓うよ」

一ずっと、傍にいと。

慶喜さんのくれた一言がゆっくりと心に滲み渡ってゆく。

「だから、お前も今、ここで約束してくれないか」

一俺のただ一人の女であり続けると。

私はコクコクと頷いた。涙が溢れて頬を流れ落ち、言葉にならない。



春も夏も秋も冬も、ずっと二人で生きてゆく。

どれほど、この言葉一つを待ち望んだことか。この時、私は初めて知った。将軍として、あまりにも重いものを抱えた彼が何故、私に何の約束もしてくれなかったのか。

将軍ではなく、ただ一人の男に戻った彼は今、すべてのしがらみから解き放たれたのだ。

慶喜さんの手がさしのべられ、私は彼の手に自分の手を重ねた。

大きな手と小さな手。繋いだ手と結び合わされた指から、温かなものが流れ込んでくる。もう、この手をけして放さない。

私は強い決意をこめて、彼を見上げる。彼がにっこりと笑って頷いた。まるで、お前の気持ちはよく判っているよ、とでもいうかのように。

また、遠くで鳥が鳴いた。何故、自分が存在していた時代から百年以上も前のこの時代に時を越えて来たか？

私は今まで、その問いに対する応えをずっと探し続けてきた。けれど、その応えはいつも濃い霧の中を手探りで進んでいるときにも似て、掴めそうで、なかなか掴めなかったのだ。

だけど、今、やっと判った。

私は彼に出逢うために、この時代に時を越えて来たのだ。「徳川慶喜」、第十五代将軍となった彼に愛され、また私も彼を愛するために。

私は涙を堪えて彼に微笑みかけた。

「素敵な写真をたくさん撮ってくださいね？」

「ああ、もちろんだ」

明治元年（一八六八）年、京都にいる帝に恭順を示すために寺でひたすら謹慎する前将軍徳川慶喜の傍らに、影のように付き従う美しい女がいたという。

慶喜は彼女を「ゆう」と呼んでいた。後に彼が静岡に移り住んだ後も、彼の厚い寵愛を受けて数人の子をなしたといわれる女性であるにも拘わらず、その出自は不明とされている謎の女性である。

なお、鳥羽伏見の戦いで幕府軍を率いて戦いながら、途中で逃げた慶喜は「総大将にあるまじき行い」とその脆弱さをそしられた。

だが、恭順謹慎、江戸無血開城などにより、無血革命に近い状態で政権移譲できたことから、近代日本の独立性が守られ、維新への功績は大きいと評価された。

慶喜の恭順により、京都や江戸が焦土となることをまぬがれ、また、フランスの援助を拒絶したため、外国の介入がなかったとし、彼を維新最大の功績者の一人であったとする見方もある。

【第二話 了】

「東めぐみ」の筆名で創作活動を始めて、そろそろ20年になります。その中で拙いながらも、たくさんの作品を創り続けてきました。時代小説・歴史小説をメインに書いている私ですが、今回、初めて「二次創作」というジャンルを手がけることになりました。

そのきっかけは、アメブロのアプリゲーム「艶がーる」にハマったことです。

現代を生きる女子高生がひよんなことで江戸時代、幕末にタイムスリップして幕末の志士たちと恋愛するというシュミレーションゲームです。これがなかなか面白い。歴史上の事件や出来事、更には実在の人物などを巧みにストーリーに織り込みつつ、興味深く物語りが進んでいきます。この歳になるまで乙女ゲームとは無縁でしたが、なかなか、よく作られた物語世界にあっさり引きこまれてしまいました。

そんなことがきっかけで、初めて書いた二次創作が今回の作品集です。もちろん、世界観はゲームを借りていますが、ストーリー展開は私独自のものになっています。

ふと、せっかく書いた作品たちと大好きな花の写真をコラボさせたフォトブックができないものかと考え、連休最後の日に近くの公園に行って花たちを撮影しました。

初夏の花たちと小説、自分では一生懸命作ったつもりですが、いつもながら拙いものになっていると思います。

よろしければ、お目通しいただければ幸いです。

2016年5月11日

東 めぐみ 拝



永遠～あなたを愛したことを後悔しない～【艶が一る】二次創作小説集

<http://p.booklog.jp/book/106921>

著者 : megumi33

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106921>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106921>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ